

2025年11月23日 第二礼拝

説教題『約束を「共に」待つ』使徒言行録13章1～3節

主任牧師 加藤 誠

「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあバルナバとサウロを私のために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた」(使徒言行録13章3節)

いよいよ来週からクリスマスを待ち望むアドベントを迎えます。このとき改めて「待つ」ということを思いめぐらしてみました。「待つ」ということは難しいものです。わたし自身は「待つ」ということが基本的に苦手です。「早く結果を手にしたい」「しかも自分にとって良い結果を手にした」という思いが強くなるからです。なので「待ちきれず」に、つい焦ってしまう自分がいます。

ただ「何を待つか」で、その待ち方はずいぶん変わってくるのではないかと思います。例えば入試の可否の判定や裁判の判決を待つような場合は、不安や恐れを抱えて落ち着かない時間を過ごすことになりますが、良い結果の実現が確実視されていて、その実現までの時間を待つ場合には、多少の忍耐は要しても待つことができます。我が家では二匹のトイプードルを飼っていて朝夕にフードを用意しますが、毎日その時間が近づいてキッチンに誰かが立つと、ピンと背筋を伸ばして待ちの姿勢を取ります。多少待ち時間が長引いても、それは見事な姿勢を崩さず待ち続けます。フードが確実に準備されていて、期待が裏切られることはないことを知っているからです。「待つ」にしても、それが確実に良い知らせで、実現する人が信頼できる相手ならば、多少その実現が遅れても、私たちは心折れることなく待ち続けることができるのです。

聖書の神の約束は、私たちを愛してやまない神という信頼できる方の約束であり、私たちの歩みを喜びと慰めに導く確かな約束であるゆえに、不安や恐れにさいなまれる必要はありません。神の愛の約束は、私たちの思いをはるかに超えて、私たちの心に思い浮かびもしなかったことが必ず実現していく。これは旧約聖書のはじめからイエス・キリストの出来事まで、聖書が一貫して告げている確実なメッセージです。

使徒言行録は「父の約束されたものを待ちなさい」という復活の主イエスの言葉で始まっています(1:4)。その言葉を受けた弟子たちは「一つのところに集まり、共に祈りつつ」、約束が実現するのを待ちました。いったい何が起こるのか、まったく見当もつかない中で。もし彼らが自分の家に帰り、それぞれに時を過ごしていたら、ペンテコステの出来事はあれだけ力強いものになっていたでしょうか。彼らがバラバラではなく「共に」待ち、祈っていたゆえに、彼らは「教会」として建てられ、「新しい扉」を開けて世界に出かけていく、ダイナミックな働きが可能になったのではないのでしょうか。わたしはここに教会の力の源を見ます。

主イエスが語られた「父の約束」。それは聖霊が注がれる約束であり、弟子たちが地の果てに至るまで「主イエスの証人となる約束」です。主イエスの福音は十字架で終わってしまったのではない。復活した主イエスが昇天して終わってしまったのではない。小さく弱さと欠けを持った弟子たちの上に聖霊が注がれて、主イエスの福音が出来事となり続ける。これが主イエスが語られた「父の約束」です。私たちは肉の目で主イエスを見ることができなくても、「私が生きているので、あなたがたも生きることになる」（ヨハネ 14：16）という喜びの約束をいただいているのです。聖霊が注がれる「父の約束」はペンテコステで終わったのではない。その後エルサレム神殿で逮捕されたペトロとヨハネの上に、石打ちのリンチにあったステファノの上に、迫害によってエルサレムを逃れていった弟子たちの上に「父の約束」は実現し、「イエスの証人」となり続けていく。これが使徒言行録が語り伝えているメッセージです。

そして、今朝の使徒 13 章で、聖霊の注ぎを受けたアンティオキア教会が、教会の歴史の中で「まったく新しい扉」を開けて、新しい仕事を始めていきます。それは異邦人たちに向けてイエス・キリストの福音を届けていく仕事でした。実はそれまでもフィリピやペトロを通して個人的に福音が異邦人に届けられたことはあったのですが、正式な教会の決断にはなっていませんでした。この画期的な決断にアンティオキア教会が導かれたのは、たまたまのことではなく、神が「前もって」計画されていた、「父の約束」の実現であった点がとても重要でしょう。「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた…」（使徒 13：3）。この 3 節には断食という言葉が 2 回繰り返されています。断食は集中することです。一時間二時間ではない。一日二日三日と、神を礼拝することにみんなが集中したのです。神の語られることに集中して、神の知恵と力、励ましを受けていく。その時、教会は聖霊が告げる神の言葉を一緒に聞いたのでした。ここにペンテコステの時と同様、神の約束の実現を「共に待つ祈り」こそが、教会をイエスの証人として立てていく力であることが示されています。

「選び出せ」とは「聖別する」こと。「わたしが前もって二人に決めていた仕事に当たらせるために」。人々が考える、はるか前から神が計画し、決めておられた仕事。いったい誰がバルナバとサウロという二人の組み合わせを「前もって」予想できたでしょうか。バルナバはペトロたちエルサレム教会の間で評判がよく「慰めの子」と呼ばれていた信任厚い人物。かたやサウロはそのエルサレム教会の人々を迫害し、何人もの弟子を殉教に追いやった人物です。そのように対極にいた二人のことを、しかし神は「前もって」聖別しておられた。驚き以外の何ものでもありません。けれども、そうやって主なる神は「ご自身の約束」を、人の心をはるかに超えた形で実現させていく。そういう意味で、使徒言行録は「父の約束の前進の物語」です。今年のアドベントの時、この良き知らせの約束を「共に」待つ信仰を求めていきましょう。